



日蓮聖人の見たる 佛教史觀

高 田 惠 忍

開目鈔、本尊鈔、撰時鈔、報恩鈔等を中心とし、有ゆる祖書に顯れたる所を綜合して聖人の佛教史觀を考察するに、聖人の頭にはたしかに傍系佛教史と正系佛教史といふ二つの史觀が存したことを肯き得る。傍系佛教史とは非法華經中心の佛教史で、今日行はれつゝある三國佛教發達史が方にそれだ。正系佛教史とは法華經中心の佛教史で、この中にも正と閏とが立つ。閏とは光宅、嘉祥、慈恩、一行聖德太子(光宅に依る故)、慈覺、智証、安然、惠心、檀那その他各宗高僧の扱へる法華經觀の歴史がそれだ。正とはその純粹に約して釋尊、天台、傳教、日蓮の次第なる三國四師の法華傳燈史がその一、更に一部唯迹の迹化天台傳教の法華觀より、一部唯本本化日蓮の法華經觀の如何に法華の中心生命に飛躍せるかを示す方面の超歴史的なる本佛釋尊、本化上行、日蓮の次第に立つ法華傳燈史がその二だ。普通前者を吾祖外相承の次第、后者を内相承の次第、前者を歴史的、后者を超歴史的と見てをる。前者の

外相承を更に敷衍すれば、印度に於て龍樹、天親、支那に於て法華傳譯の羅什三藏を加ふべきが如し以上の如き傍系佛教史と正系佛教史の二つの史觀が頭に存して、是に於て本門立脚の法華經觀、本化獨特の題目宗の宣揚と共に、對佛教諸宗の橫縱の批判として顯れし、それが日蓮宗學といふものである。殆ど吾祖と同時代の佛教學者なる凝然の如きは靜的な純佛教史家なるに對して、吾聖人はさすがに本門立脚の信に立つ白熱の法華經行者なるだけに、その史觀に於て當然傍系と正系と二つの史觀ありし事を豫想せずには聖人の對諸宗批判の教義は解釋し難いのである。

傍系佛教史と正系佛教史の差異は、法華經に對して相對價值の見解に立つか、絶對價值の見解に立つかに依て別れる。從て傍系佛教史とは一般の三國佛教發達史の謂ひ、正系佛教史とは三國の法華傳燈史の謂ひである。中に於ても閏の傳燈史は法華に對し相對價值の見解に立つから、攝して傍系佛教史に屬し、今は法華に對し絶對價值の見解に立つ三國に於ける正の法華傳燈史を意味する。五大部中心の祖書全篇に二つの史觀の材料はたしかにある、然し前者の存在は后者の爲めの存在のみ。聖人の史觀の中心は后者に存する。然らば閏を去れる眞の正系佛教史觀何ぞや。それは佛滅後の區分を以て大悲經、善見律等の指示に基き正像末の三時に別ち、又大集經の指示に依り右の三時を更に五ヶの五百歲に別ち、法華經藥王品の后五百歲廣宣流布の文を有意義ならしむる見方の佛教史觀である。既にいへる如く正系佛教史觀とは法華經に對し絶對價值を認むる見方である。然して法華經の内容は前權

后實、開權顯實、開迹顯本がその内容である。といふことは法華一部の中、迹門は昔迹相對、本門は迹本相對であつて、法華一部は要するに昔迹本三重の次第を明にするものである。

經典の成立研究に没頭する史的研究所の立場から、天台の五時判を兎や角いふことが今の流行のやうである。然るに法華以外の諸經と法華經との必然的關係を明にし、前權后實、開權顯實、開迹顯本といふことが三世諸佛說法の通規なりとして、法華經を一切諸經と關係づけて所有經典の最後の結論の位地に置くべく開展された、あの五時八教判の有ゆる教判中の最優の教判であり、從て后世佛教史上に與へたる影響も又最第一なるに於て、天台の眼識の非凡に對して驚歎すべきは自他の共許する所である。史的研究所の立場の外に教權的或は理想的研究の立場を豫想し來る時、天台の見方は依然として一方の權威であらねばならぬ。吾聖人の正系佛教史觀は天台と全然立場を同うして迹本の區別を究盡せる点に於て、天台より百尺竿頭に一步を進めしものだ。

在世の佛教は要するに昔迹本の關係に過ぎない。蓋し華嚴、阿含、方等、般若の諸經は、小乗若くは權大乘であつて、機根未熟の爲めに且く爲實施權せしに過ぎぬ、已に四味三教を開出して彼等を誘掖開導して今正に法華の眞實を開示すべき時至り、前の爲實施權を收めて開權顯實し來る、それが實相論、佛性論を開示せる法華經迹門の所説である。故に迹門は方に昔迹相對といふべきだ。更に本門は佛陀の本地を説き、今番の釋迦は勿論、有ゆる佛々例へは彌陀、藥師、大日、大佛等、要するに壽

量本佛の本に對すれば垂迹のみと喝破した。即ち本門の開迹顯本は方に迹本相對といふべきだ。かやうに見て來ると、在世の佛教一代五十年の所説、要するに昔迹本三重の次第のみ。然してこの三重の次第それが法華迹本二大教義の骨旨を爲す。然り而して滅后三時の佛教史、亦實に昔迹本三重の次第にすぎぬと見る、それが吾聖人の正系佛教史觀といふものだ。

蓋し正法 佛教とは大集經に依るに、第一の五百歳を解脫堅固(意の)の時、第二の五百歳を禪定堅固の時として、共に昔の小乘權大乘流布の時と見るのである。印度に於ては小乘二十部の分裂、乃至六百年の馬鳴、七百年の龍樹、九百年の世親無著の時代より那爛陀教學の時代が正しくそれだ。次に像法佛教とは第三の五百歳を多聞堅固の時とし、支那に入て六朝時の傳譯佛教より、光宅等を中心とせる南三北七の諸派を経て、その中心を陳隋二朝の天台大師とするのである。法華經迹門に立つ一部唯迹の法華觀を迹と名づける。是れ迹の教義として滅后に顯れし第一次である。支那の佛教史は要するに天台中心の佛教經典傳譯若くは佛教々判の歴史に外ならぬ。支那の佛教史から天台大師を取りさる事は、日本の佛教史から叡山佛教を取り除いたやうなものだ。天台大師中心の羅什、玄奘であり、賢首、嘉祥、慈恩、三三藏、達磨、善導、道宣等であらねばならぬ。更に同じく像法にして、第四の五百歳を多造塔寺堅固の時とする。その中心を平安朝劈頭の傳教大師となす。傳教の佛教を以て圓、密、禪、戒の四宗相傳といふが、密禪の二は後の附會多きにをり、その重要著書から見て、その要部をば圓、

戒の二とすべきである。圓とは天台と同じく主として一部唯迹の法華の謂ひ、戒とは天台の圓定圓慧を弘めしに對し、法華の中心教義に梵網經の十重禁戒を加味せる正依法華傍依梵網の圓頓戒に外ならぬ。かく天台以上に圓戒を發揮せしも、その教理は依然として迹を出でぬ。然してその日蓮聖人出現以前日本佛教史上中心の位地にあることは、支那佛教史上の天台の位地に變らぬ。聖德太子が日本佛教の母たるはいふまでもないが、傳教の法華中心に立つは元より太子と共鳴する所なるべく、その大きさに於て、太子以後の第一人なるべく、奈良の六宗も、弘法の眞言も要するにその前驅と后殿にすぎない。叡山佛教から覺、証、然、惠、檀二流を出し、良忍、空也を出し、法然、榮西、道元、親鸞日蓮を出せるに見る、日本佛教の搖籃それが叡岳でなくて何であらう。その源頭に立つが實に傳教だその偉大以て諒すべきではないか。

次に末法佛教とは第五の五百歳を以て鬭諍堅固、白法隱沒の時とする末世の佛教をいふ。盖し大集經の意は、小乘、權大乘の隱沒を豫言せしのみ。法華經藥王品には后五百歳廣宣流布とある。是れ正しく吾日蓮聖人の流布すべき一部唯本の法華經題目宗の流布に就て佛陀の豫言せしもの、諫曉八幡鈔の日は東より出て西を照す、日本の佛法の月氏へかへるべき瑞相といひ、取要鈔の一天四海皆歸妙法といふ、方に此謂のみ。天台の后五百歳遠沾妙道といひ、荆溪の末法の初め冥利無きに非ずといひ、傳教の末法甚た近きにあり等は、傳教のは本化を豫言せしと見るべく、天台荆溪は共に法華經流布を通

漫に暢べてをるのであるから、自ら中に本化の聖教を含むわけである。吾日蓮聖人が末法に入て一百七十二年にして出世せられし使命は、迹門に立脚する天台傳教に依て最高の教理たるを証せられし法華觀より進一步、本門佛陀論を高くかゝげてこの本佛に迹佛の有ゆる佛々を統一せしめたる本佛釋尊をかゝげて、これに絶對歸命をさゝげる信心の究竟に依て、自己完成を期すこと即ち觀成を將來せしめ得る理想を題目五字に打こめしが、本門の題目、絶對の本佛に沒頭することに依て、やがて我が本佛体内に攝取せられて自我完成にまで進みく、その絶頂を極めし時、本佛及本佛緣起の本尊がそのまゝ自我及自我開展の本尊となるべく、その理想の表現、それが十界大曼荼羅なる本門の本尊なることを説きしが、事一念三千觀信即觀の義である。是が即ち天台傳教の迹の教義に對して、吾聖人のを本[●]の教義とする所以である。事實吾聖人の法華本門立脚題目宗の信即觀の教義に於て法然、親鸞、榮西、道元等の着眼せし端的の教旨、絶對信心の教義が盡く綱羅されるのである。

是の如く三國の佛教發達史に於て、正法の中心を昔[●]像法の中心を迹[●]、末法の中心を本[●]となす、昔迹本三重大第の佛教史こそ、實に三國佛教史の根幹をなす正系佛教史と見る。それが吾聖人の佛教史觀の中心である。その他の變遷史は要するにこの正系史の外延をなす傍系史にすぎない。かやうに吾聖人の佛教史觀にはたしかに傍系史と正系史の二つの史觀の儼存することは又疑ない。見來れば日蓮宗學の底邊の博きは佛教各宗第一に位する。何となれば昔迹本の三重大第に於て、吾聖人は三國佛教史上

最後の結論を與ふべき大自信を以て臨まれたからである。従て昔迹本三重の次第を三國の佛教史上に宣明するは勿論、その外延の佛教史としての傍系佛教史にも審かならざれば、盖し中心佛教としての正系を知るに由ない。又三重の次第は縦の問題のみでなく、横にも三重批判で進まねばならぬ。といふことは迹本相對に於て台當の區別を、特に迹化と本化の使命を明にせなければならぬ。又内容的には彼の觀心宗に對して、我の以信代慧宗、信即觀宗たることを明にすべきだ。更に昔迹相對、昔迹本相對に於て、完全に縱横に諸宗を批判すべきである。四ヶ格言の絶對折伏主義もこの義邊に屬する。要するに縦に約しても、横に約しても三重の次第でゆく、それが法華經そのものだ、かくて日蓮宗學の對象は對他的には佛教諸家學といふことになる。以て底邊の如何に最廣なるかを了すべきである。

以上日蓮聖人の三國佛教史に對する二つの史觀の概説を試みた次第である。

維時昭和三年九月二日、祖山にて、法のみ庭に漂ふ木屋の
香をかぎつく稿了。

